

新連載 6

言葉おくれの子どもにはワーキングメモリーの刺激が必要です

これまでは知能は生涯変化しないとアメリカの学者の説が採用されてきました。最近出た科学の雑誌『PANAS』にワーキングメモリーを活発に使うと、子どもの知能は変わるというコロンビア大学の研究論文がありました。いったいワーキングメモリーとは何か、非常に興味のある話です。ワーキングメモリーというのは、私たちは何かをしているときに用事があれば、それをそのままこちらに置いて何かし、戻ってきた後もそのとおりのことができます。独特な行動や記憶を保存するパターンが脳にはあるらしいです。あるいは、子どもに適当な数字「5、6、7、8」と言ったら子どもが「5、6、7、8」という能力がワーキングメモリーです。

言葉おくれの子どもの脳の聴覚野を耕してあげる

言語おくれの子どもは、言葉が分からないのではなく聴覚刺激が充分でないのです。なぜあの子たちはしゃべらないのか。耳が聞こえる、呼吸もできる、運動もできるのになぜしゃべらないのか、それは理由があるのです。聞きたくない音と、聞きたい音を分けられないのです。いつもテレビがついている家庭や騒がしい保育室では聴覚野が育ちません。言葉おくれのリスクのある子どもは、静かな保育室の中で、先生がその子と個別的に関わる必要があります。この遊びが駄目ならば別の遊びに興味を持たせればいいのです。砂を嫌がれば水でやればいいのです。砂を嫌がればお父さんのひげそりのパウダーを使った感覚遊びを行えばいいのです。

先天的な重度の遺伝だと信じられていた難病が治りました

クレチン症は甲状腺ホルモン異常が原因で、体の小さい子が生まれます。甲状腺の異常は海藻などのヨードを、体の中に蓄積していない人に起こります。アルプスの谷間にある村に、何百年となくこのクレチン病の人がたくさん生まれたので、呪われた村だといわれていました。村の人もうちの村だけに生まれる遺伝だと思っていたのです。ところが、この村はアルプスの山の上にあり、数十億年前の氷河期に氷河がこの山の半分を崩してしまい、土中のヨードが全部崩れてヨードが一切ない土壌だと分かりました。動物もこの病気にかかっていました。先天的重度障がいと考えられていたクレチン症は、ヨードを使用すると回復した話です。

保育には無数のきっかけがあります

声に出す言葉がほとんどない、指さしをしない、「何々ちゃん、あれを見て」

と指さしをしてもその方向を見ないので、グループで遊んでいても大半は 1 人遊びで全く音声を持たなかった子どもがしゃべり始めたのです。迷子になりました。お父さんとお母さんは必死になって丸 2 日探したら、2 日目の夕方警察から、しゃべらない、ちょっと変わった子がいると電話がかかってきました。それで服装からうちの子だということでお母さんが飛んでいき、顔を見るなりなり向こうから「ママ」と大声で泣いたそうです。これがきっかけになってしゃべり始めたそうです。

未熟児や低体重児の育て方

現在のアメリカの教育問題の一つは、10代の黒人高校生の妊娠です。宗教上の理由で子どもはおろすことはできないので、妊娠した高校生の多くは中退です。また、生まれた乳児は未熟児を含めて低体重も多いのです。

そこでこのような実験が行なわれました。30名の赤ちゃんを15人ずつに分けます。15名のうちの半分を、一般の病院と同じように酸素が調整された保育器の中に入れて、1日数回看護師さんたちが保育器の中でおむつを替えミルクを授乳します。これはどこの病院もやっている育て方です。あと1組の15名はこうします。ベテランの看護師さんが、乳児が自分で呼吸ができると見たら、数分でも外に出して揺さぶり、声を掛けるそして戻します。すると、めきめきと赤ちゃんが変わっていくのです。